

## 小林三郎教授の逝去

2006年11月5日、本学の教育研究に大きな役割を果たされ、また40年以上駿台史学会会員として会務にも貢献された明治大学文学部考古学専攻教授の小林三郎氏が逝去された。享年69歳。定年まであと任期を5ヶ月残すのみであった。

小林先生は1937年1月13日に東京都北区で生まれ、1956年4月に明治大学文学部史学地理学考古学専攻に入学。駿台史学会賞を受賞した卒論「前期古墳の編年」を提出し1960年3月、同専攻を卒業。翌月大学院史学専攻考古学専修に入学、「前期古墳の研究」と題した修士論文を提出し、1962年3月には同専修修士課程を修了された。

修士課程終了直後の1962年4月に明治大学考古学陳列館（現在の明治大学博物館考古学部門）学芸員として採用された。1971年4月には明治大学文学部専任講師となられ、1976年4月に助教授昇格、1982年に教授昇格され、生涯この地位にあった。その間、1982年3月には『古墳時代倣製鏡の研究』で文学博士の学位を受けられた。

博士論文のテーマが示すように、小林先生の生涯の研究テーマは中国鏡を古墳時代の日本列島で倣倣製作した鏡であった。倣倣といっても、中国鏡を素材に、日本流にアレンジして製作された鏡の種類も多く、プロトタイプの中国鏡の型式が如何なるものか、判断に苦しむケースも多い。先生は鋭い観察眼で、倣倣の素材をいろいろ同定しておられた。それを出発点に、古墳時代の日中関係にも造詣が深かったし、中国考古学の動向にも大変敏感であった。

一般向けの著書も古墳時代を対象とするものが中心で、大塚初重名誉教授と一緒に編まれた『古墳大辞典』（正編は1989年、続編は2002年東京堂刊）が著名である。一般書店でも入手可能な古墳の発掘調査報告書として、『信濃大室積石塚古墳群の研究』（Ⅰは1992年、Ⅱは2006年東京堂刊；Ⅰは品切れ）がある。このほか、茨城県ひたちなか市塚塚古墳や同小美玉市（旧玉里村）権現山古墳など、地方自治体から請け負われた発掘調査の報告書は数知れない。晩年の研究成果である『霞ヶ浦北岸地域における古墳時代在地首長層の政治的諸関係理解のための基礎研究』（科研報告



書）は、『日本考古学年報』『史学雑誌』の前年度の動向で、高い評価を受けた。

さらに驚かされるのは、古墳研究者でありながら、陳列館学芸員時代の経験からか、石器や縄文土器の分析もこなされたことである。石器や縄文土器を扱える古墳時代研究者は極めて稀ではないだろうか。先生が師と仰いだ杉原荘介教授が、旧石器時代から古墳時代まで幅広く論考を発表していたので、その道をご本人も歩まれたのであろう。もちろん、古墳時代以外の様々な時期の遺跡の発掘調査も器用にこなされている。同僚の安藤政雄教授は、「現場学」こそが小林考古学の真髄と評価する。

明治大学での小林先生は、組合書記長（1989年就任、以下同じ）、組合実行委員長（1990）、史学地理学科長（1992）、考古学博物館長（1996）、大学院文学研究科委員長（2000）などを歴任され、大学の運営に尽力された。また学外での役職はさらに数多く、文化庁文化財保護審議委員会委員は勿論のこと、様々な地方自治体の文化財保護審議委員会委員、様々な遺跡の調査委員会委員や委員長を務められた。地元の北区では北区飛鳥山博物館名誉館長として貢献され、また1963年以来会員であった日本考古学協会では、委員を長く務められたほか、2000年5月には副会長に選出され、2期4年間副会長として、旧石器捏造問題でゆれた当時の日本考古学協会に尽くされた。

小林先生の貢献は、学内外の様々な側面で極めて幅広い。また学問的にも、古墳時代考古学に限らず、様々な時代の遺跡、遺物に深い造詣を示された。そのあまりに早すぎるご逝去で、その穴はなかなか埋まりそうもない。（佐々木憲一）